

汎愛派教育思想における暴力と理性

—バゼドウの『基礎教科書』を手がかりに—

山内規嗣

(2009年2月13日受理)

Force and Reason in the Educational Thought of Philanthropinism -Focused on Basedow's "Elementarwerk"-

Noritsugu YAMAUCHI

The purpose of this paper is to analyze Basedow's textbook "Elementarwerk" from two points of view: on one hand, how Basedow has explained the force in the world and human; on the other hand, how the force was in his discription for this aim. As a modern pedagogical thought, Basedow could'nt save his work from the force in the modern social system, and this fact is obviously recognized through the difference of meaning between his text und the figures.

Key words: philanthropinism, force, Elementarwerk

キーワード: 汎愛派, 暴力, 基礎教科書

はじめに

理性による自然支配が人間の道具化と野蛮への退行を生じさせたとする「啓蒙の弁証法」(アドルノ、ホルクハイマー)は、文明化の過程全体に潜在する反人間的な暴力性に向けられた批判であるとしても、歴史的な意味における啓蒙主義の18世紀が、暴力の問題をめぐる現代の言説において重大な画期と見なされていることは疑いえない。国家理性(マイネッケ)、資本主義、主体=男性優越主義などの諸制度・理念は、その淵源をはるか過去に抛りながら、フリードリヒとスミスとカントの時代に「近代」としての集積をなすに至った。このとき、教育学もまた、その近代的主体の形成手段として成立し、理性-感情、文明-自然、主体-客体、大人-子ども、男性-女性などの二元論的思考に依拠しつつ、人間に対する人間の制度的暴力を担ってきたとされる。そのような批判を行う今日的言説もまた、代わって提起する「学び」の関係性が他ならぬ子どもの側から暴力的に切断される可能性を胚胎しているはずだが¹、それを措いてひとまず問題とされ続けているのは、新教育運動にも通底している近代的な教育理念の、そして教育者の、本来的な暴力性ということになる。

この暴力性について、近代的主体形成を目的とする

理性が子どもを客体=操作対象と見なしていくという図式において捉えるとき、ルソーが示した逆説よりもいっそう明示的なその事例として、ドイツの汎愛派教育思想が注目される。²とくにその名の由来する汎愛学舎の創設者として、汎愛派を代表するバゼドウ(Basedow, Johann Bernhard, 1724-1790)は、彼自身の激情的・暴力的性格についてもしばしば言及されるどころであり、その著作についても例えば「闇の教育学」の一角を占めるものとして、すなわち経験に基づく実証性のない教育学的思弁の成果を子どもに強制するものとして理解されている。³この解釈がバゼドウの教育実践に対する理解を無視したものであるとしても、彼の教育思想を支える問題意識を、市民社会のいまだ成立していないドイツにおいて近代化を前近代的国家制度のもとで強制的に促進しようとする矛盾のうちに折出するとき、たしかにそこには人間を自発的服従に向けて規律化しゆく暴力性が見出せる。⁴

このようなバゼドウ理解に立脚しながら、その暴力性の具体的な現れを彼の著作に辿ろうとするならば、「服従」の形成過程についての研究が、すでに彼の教育言説における論理構造上の問題としてそれを見出している。⁵これに対して本研究が注目するのは、バゼドウが教育的著作において暴力について叙述するその内容と方法についてである。このきわめて端的な視点によ

って、バゼドウが自らの教育的意志に基づいて暴力を捉える自覚的叙述と、そこに伏在する無自覚的な暴力性とを対照させ、彼が提起した啓蒙主義的な教育の暴力性を、この対照のうちに浮かび上がらせるものと考えられるからである。

この試みに最も適切な対象として取り上げるのは、バゼドウが汎愛学舎創設と同年に刊行した『基礎教科書』(1774)である。1768年の『提言』にその構想を記したのち、いくつかの準備的著作を経て完成に至ったこの浩瀚な教科書は、バゼドウが構想した教育改革とそれに基づく絶対主義体制下における社会改革のために、「すべての人間にふさわしい事物知識と言語知識」⁶としての教授内容を網羅したものとして、一つの到達点を示している。その叙述は、子どもの生活・遊びを起点として、心身、論理学の初歩、宗教、習俗、職業・身分、政治体制、人文・自然諸学、文法といったカテゴリにもとづく各章によって構成されており、さらにそれらの教授内容を視覚的に理解させるための方策として、当代の著名な銅版画家であるコドヴィエツキ(Chodowiecki, Daniel Niklaus, 1726-1801)らによる100枚近くもの図版集が、叙述と密接に対応するかたちで用意されている。この図版集を繙いていくと、そこには人間界における暴力の姿が、本研究に示すようないくつかのカテゴリに大別されつつ描かれている。しかも、このコドヴィエツキは、『ベルリンからダンツィヒへの旅』(1773)によって当代随一の風俗・風景版画家として名声を博し、後にカンペの著作にも図版作成を依頼され、ベルリンのアカデミーにも招聘されたのだが、その評価を支えたのは技術にくわえて対象への鋭く人間味あふれた観察眼だった。その彼による図版集は、バゼドウのテキストを視覚的に補完しつつも、コドヴィエツキ自身のテキスト解釈を通じてバゼドウの意図を具体化しようとしたことによって、叙述内容を越えたいわば過剰な意味までも読者に提供してしまっているのである。このようなテキストと図版のずれは、テキストにおけるバゼドウの自覚的な暴力批判と無自覚なテキスト内在的な暴力性とのずれを検討するための、有効な手がかりとなるだろう。以上の問題視점에立ち、本研究では、人間にとっての暴力という視点を基軸にして、バゼドウの『基礎教科書』における教授内容の相互連関の再検討をも試みるものである。

1. 『基礎教科書』における暴力の人間の起源

まず、バゼドウは、暴力について子どもにいかなる内容を教授しようとするのだろうか。それは、『基礎

教科書』の構成にしたがい、人間性と暴力の関係をもとに、その必要性と限界を教授するものとして確認される。

(1) 子どもの生活と暴力

この図版集を開けば、読者は、ほとんどその冒頭から暴力の描写が登場していることに気づくだろう。子どもの生活圏を扱う導入部において、図版 III. に描かれているのは、男女それぞれの衣服と、それを子どもが台無しにする様々な状況例である。その事例の中に、最初の暴力の描写として、子ども同士が床に転がり合う喧嘩の姿がある。行儀のしつけ(Sittenlehre)の第一歩が反例を手がかりとして教授されるべきこの場面において、暴力とはひとまず、子ども自身が日常生活のなかで無自覚のうちに実行している悪の一形態として、具体化されているのである。ただし、それは、あくまでも衣服に害を及ぼすという意味においてであり、喧嘩という暴力自体の問題がこの場面で扱われているわけではない。

これに続いて、子どもの遊びが多種多様に描かれている図版 V. では、軍隊遊びや弓矢遊びが男の子遊びの代表として示される。当時の遊びが実際にそうであったように、子どもの弓矢が狙う小鳥はこの遊びによって射抜かれることになる。あくまでも遊びというかたちで、しかし子どもの行為の中に暴力は明確に存在する。しかし、ここでも暴力そのものについての言及はなく、ただ後述するような男子と女子の遊びの相違のなかに、性差についてのバゼドウの認識が具体化されることとなる。いずれにせよ、この段階でバゼドウが意図していることは、子どもの生活世界における暴力の存在を、子ども自身の行為のなかに反省的に認識させることに留まっており、この導入をふまえて、暴力についての教授がより詳細に進められていくこととなる。

(2) 衝動としての暴力とその抑制

バゼドウは、こうして暴力を子どもの実体験に即して認識させながら、その様々な原因を段階的に説明していく。まず登場するのが、「人間の意志」の項における「強い生存衝動」である。バゼドウは、この衝動を人間にとって本来的なものとして叙述することによって、人間の暴力を、自己の生命を維持するために不可欠なものとして認めているのである。

しかしながら、バゼドウは、これと同時に、生存衝動に執着することについては「魂(Seele)の不滅」

を確信していないがための行為であるなどといった留保を行うことによって、宗教教授の領域に踏みこみながら批判的な説明を付け加えている。⁷生存衝動の絶対化が否定される時、次に表れるのは、一定の制約下におけるその肯定である。これを説明するために付された図版 XIII は、他者からの理不尽な攻撃に対して自らの生命を守るために反撃する男性を描いている。(図1)



図1

この絵では、たしかにバゼドウの叙述に従って、攻撃者は穀杵を振り回す「激昂者 (Rasend)」としてその激しい表情も顕わな姿を与えられている一方、自己の生命を守るために暴力を用いる防御者の側は、短銃を構えつつも冷静な表情で敵を見据える姿で具体化されている。攻撃者は明らかな殺意を漲らせているが、それは生存衝動の絶対化に基づいた行動である。これに対して、防御者は短銃を攻撃者の足に向けて狙いを定めているが、このことは、自己の生存衝動を認識するがゆえに他者の生命を尊重しようとする理性的判断と、攻撃者までの距離がただちに相手の命を奪わずとも十分なだけ開いていることに基づく悟性的判断との現われとして説明されている。生存衝動がこのように制約下におかれることによって、人間の暴力はようやく肯定されるものとなるのである。

ところが、バゼドウがあくまでも人間の本質から暴力とその抑制について子どもに教授しようとするこの段階において、図版を作成したコドヴィエツキは、バゼドウのこの叙述を踏まえつつ画家としての解釈をさらに付与した視覚化を行った。攻撃側の「激昂者」は、擦り切れた衣服をまどわされ、伸び放題の髪を振り乱し、素足で襲いかかろうとしている。理性的な防御者は、髪も衣服も整った純良な市民男性の身なりで登場する。表情、衣服、使用武器などの諸点において、こ

こでは明らかに、衝動と理性の、また野蛮＝非文明と文明の対比が、そして前者に対する後者の勝利が読者に看取される。⁸そしてそれは、抑制なき暴力に対する、理性によって抑制可能となった暴力の優越を、明確に物語るのもでもあった。こうして文明的な人間社会が、文明化された強大な暴力の理性的行使者として、非文明的な暴力とその担い手を物質的にも倫理的にも支配するという近代主義的な視点が、その暴力性を伏せさせながら、バゼドウの叙述による教授を待たずに図版を通じて早くも子どもに提示されるのである。

2. 暴力と社会秩序

図版によって一歩早く読者に与えられた『基礎教科書』の暴力観・文明観は、社会秩序についての叙述を通じて、その具体的内容を与えられていくことになる。

(1) 性差と暴力

先に野蛮のイメージで描かれた激情的な暴力について、バゼドウは、人間の情動・感情を説明するさいにあらためて詳述している。⁹その説明を補助する図版では、例えば、「激昂」の具体像として、部屋の中で侍女に物を投げつけるやや年配の女性の姿が描かれる(図版 XXVII)。女性の足元には小さなテーブルが蹴倒され、その上に乗っていたはずの食器は床に落とされ砕け散っている。女性の右手は消えぬ怒りに高々とふり上げられ、その攻撃を向けられた侍女は身をかがめ手をかざして懸命に避けようとしている。背後の壁にかけられた姿見は、すでに女性の投げつけた食器によってひび割れを生じさせられている。激昂する女性の右奥には、若い男性がいるものの、女性を止めることも侍女をかばうこともできず、攻撃の矛先が向けられないようひたすら身をかわしているかに見える。図版 XIII では激昂する攻撃者は明らかに非文明的な装いをまどわされていたが、この図版 XXVII では、激昂する女性はあくまでもごく普通の室内着をまどっており、いわば文明の中の非文明という扱いを受けている。

また、人間の「悪い傾向」¹⁰について論じる箇所では、4つの絵が用意されている(図版 L)。そのうち「不信」の絵では、ある女性が、婚約者の男性のもとに届いた別の女性からの手紙を前にして、婚約者の愛情を疑っている。「羨望」の絵では、一方の夫婦の側の妻が、もう一方のペアの妻の華麗な衣装を見て、それを指さし夫に語りかけている。「復讐心」の絵では、望む指輪を夫に買ってもらえなかった妻が、その復讐

として、夫が家族のために結ぼうとする契約書に署名することを拒絶している。さらに、「残酷」の絵では、眉を逆立たせた女性が、手にした大きな針で子どもを刺し殺し、駆けつけた男性の命令に従うことなく、なおもその凶器を振りかざしている。いずれの「悪い傾向」についても、その具体例として描かれているのは女性による行為であり、衣装はやはり通常の市民生活のそれを逸脱してはいない。

これらの図版では、なぜ男性ではなく女性の姿を用いることとなったのだろうか。ここには、バゼドウとコードヴィエツキが依拠する当時のドイツにおけるジェンダー理解が色濃く反映されている。先の「激昂者」は、男性でありながらも明らかに野蛮の体現者であった。それと同様に、こちらの女性たちもまた、自らの感情を理性的に抑制できない非文明的人間として、否定的に描写されている。そのような人間は、文明化された暴力によって防衛的に排除されるのでなければ、抑制的暴力の所有者である理性的人間によって、その統制する暴力の保護下・支配下に置かれねばならないのである。もちろん、この時点では、そのような理性的人間は男性のみに限られているわけではない。しかし、この叙述以前に読者が目の当たりにしているはずの、男子と女子の遊びを描く図版において、『基礎教科書』は、暴力的な要素を含む遊びを男子の側にのみ認めていた。それは、男子のみが将来において暴力を抑制的に行使する能力を獲得するための訓練を、遊びというかたちで独占しているという姿によって、そのような能力の独占をもうすでに予告していたのである。

もっとも、先に明らかとなっているように、男性のすべてがそのような理性的人間であるわけではなく、その条件を充足させることが男子の教育的課題となる。それにしても、あの激昂した男性の攻撃者は、空の下で地に足つけて、背後にある廃墟の影に囲まれて逆行を浴びたかのように禍々しく描かれているが、一方のここで取り上げた女性たちは、斜めに差し込む陽射しによって照らされながら、全体として薄暗い室内でその悪しき行為を写し取られている。女性の行為の一切は屋内に限られて描写されているのであり、男性と同伴せずに戸外に出ている姿は図版集にほとんど存在しない。このことは、男女の役割について叙述する個所で明確な説明が与えられている。女性は、育児と家事に専念し、家長である男性を支える。女性によるその支えを受けつつ、男性は、実業によって家計を維持し、さらに外敵から家族や弱者を守るのである。¹¹ この男性の2番目の役割を描いた図LII.では、路上で馬車が強盗団に襲撃されたさい、その馬車に乗っている男性が他の乗客を守るために銃で強盗を射撃している場面

が映し出されている。暴力に暴力をもって対抗するのは男性の役割であり、家の外では外敵に対する守り手として、家の中では理性的に抑制された暴力の独占者である家長として家族を支配する。この市民的な男女の役割分担を踏襲することによって、社会の基本単位としての家族の秩序と平和は、「父の理性」¹² というジェンダー論的にはあまりに明白な暴力性に支えられて実現するのである。

(2) 暴力と法秩序

家長としての男性が屋外において家族を守らねばならないとき、その攻撃者はやはり男性として描かれる。例えば、上述の強盗団のほかにバゼドウらが示すものとして、酩酊者が杖を振り回して窓をたたき割り、スリが卵や帽子をかすめとる姿。また、集団で足場を組んでまでして家屋に侵入する夜盗たちや、追剥・群盗など。これらの反社会的暴力に並んで、女性がそのような暴力の担い手として唯一登場しているのは、計量のごまかしという、屋内でなされる悪である(図版XXXII)。これらの暴力はいずれも、他人の生命や財産に対する不当な侵害であり、それゆえにバゼドウは、社会秩序を破壊するものとして厳しく否定している。¹³

これらの暴力を抑制するために、家長による個々の家における防衛手段が講じられるとしても、それは必ずしも十分な効果を期待できるものではなく、またそのために実業の努力が阻害され社会の発展が滞ることは、功利主義的な観点からも望ましくない。このことを確認したのちに、バゼドウは、抑制されざる暴力を社会全体として抑制するための手段として、国家を含む諸制度と権力を説明することとなる。¹⁴ 地域共同体における公論形成にはじまり、共和政治や君主政治について概観しつつ、国家が法と公正の執行者であることが論じられる(図版XXXIII)。これを執行するための手段として描かれるのは、様々な刑罰とその執行装置である(図版XXXIV)。例えば、裁判官が司法の実務者として責任を負う。官吏がその決定を遂行する。とくに刑罰については、兵士に対するそれは軍隊が自ら行い、列問苦刑などの方法が伝統的に用いられる。監獄には囚人が収監され、刑罰に基づいて懲役が科される。さらに、最も重罪の者に対しては、死刑執行人が刑執行の責務と権限を担う。

これを描いた図版(図2)を見ると、左奥には、絞首刑台に吊るされた3人の死刑囚が屍をさらす。右奥には、それより以前の囚人が、車裂きの刑に処されてすでに白骨化している。それらをカラスたちがついばむ手前では、いままさに一人の死刑囚が目隠しをして

跪かされ、背後に構える執行人の剣によって首を横ざまに落とされようとしている。



図2

それを画面の一番こちら側から見つめるのは、老若男女とりまぜた民衆であり、母親の腕に抱えられた幼い子どもまでもがそこに加わっている。いずれも読者に背を向けて立っているため、観衆の表情は分からない。あるいは、読者は、ここで恐怖の表情を想像すべきなのかもしれない。しかし、観衆の身体に注目するかぎり、恐怖の身振りや緊張を示している者は、ただ一人も存在していないのである。このように描かれた観衆の態度は、バゼドウが刑罰の項目において執拗なまでに繰り返す「恐ろしい (furchtbar)」¹⁵という言葉に対して、その効果を高めるはずの図版を通じて少なからず裏切ってしまうのではないか。しかし、このことは同時に、バゼドウの意図を離れて一つの新たな視点を読者の子どもに提供するものとして理解することもできるだろう。すなわち、同時代の法学者ベッカーリアの所論を思い出すまでもなく、見せしめとしての処刑が、すなわち反社会的暴力を抑制するための権力による暴力の執行がどれほどの抑制効果をもたらしているかについて、観衆における暴力性の喚起との比較のうえで再検討するための視点を、読者に与えるものなのである。

3. 理性の限界内における平和

(1) 戦争と最善説

法刑罰は、国家権力が支配する範囲内で実効性を有する必要不可欠な暴力として描かれてきたが、これに続いてようやく取り上げられるのが、国家対国家（支配者対支配者）関係において出現する暴力、すなわち戦争である。軍事・戦争関連の叙述は、『基礎教科書』

本文では全体の2パーセントにも満たないが、図版集ではこのテーマについて直接的には5パーセント、歴史的事例を含めればそれ以上の分量を費やしている。古代ギリシャの彫像をモデルとしたレスリングや、当代の剣術、馬術などの解説も別に記したうえで、『基礎教科書』は戦争に関してきわめて詳細に説明しつつも、そこにテキスト叙述と図版とのずれを再び生じさせていく。しかし、そのずれは、はたして先述のそれと同じ性質のものであったのだろうか。

まず、戦争関連の劈頭を飾る図版LXVII.では、古代の諸部族やローマの軍隊の想像図が描かれ、おそらくケルト人・ゲルマン人と思しき集団とローマ正規軍の対照によって、未開と文明の構図が再び繰り返されている。ローマ軍兵士が棒状武器を装備しているなど明らかに時代錯誤と分かる描写は、ここではそのような対比（金属製の武装が制式化されているローマ軍と、棍棒や毛皮でまぢまぢに武装した敵軍）をきわだたせているという意味においてのみ注目される。次に、ムーア人同士の戦闘場面では、裸体で弓矢や投石、棍棒などで武装した黒人の対立する2集団が左右からお互いを攻撃しあい、混乱の中で多くの戦士がすでに倒れている。3番目の絵では、東洋の国家の騎馬部隊同士が長槍やサーベルを構えて横一線の突撃を敢行している。そして最後の絵では、軽騎兵隊の突撃を、歩兵横隊の銃剣列と大砲の近接砲撃が粉碎しようとしており、歩兵の陣営は背景を左右全体にわたって埋め尽くしている。これら4枚の絵は、軍事部門における近代的合理主義による規律化の過程を、武装・戦闘方法・戦術などの総括において一望させるものである。

これだけ詳しい説明であればすでに子ども向けの内容として十分に感じられるところであるが、『基礎教科書』は、さらに当時の戦争を理解するために不可欠な場面を取り上げていく。それは何より都市包囲戦である。このフリードリヒの時代における国家間戦争は、軍隊同士の野戦によって勝敗を決することも重要ではあったが、行軍による軍隊損耗が無視し得ない問題だった現実のもとでそれよりも重要な意義を有していたのは、政治・経済の拠点であり兵站基地ともなる都市（とりわけ要塞都市）の奪取・防衛だった。そのため、7年戦争では、両陣営は互いの要塞都市を包囲して降伏させ、あるいは敵の包囲軍を攻撃して解囲するなどの戦闘を、野戦決戦の前後に各地で重ねていったのであり、野戦はむしろその結果として生起してさえた。この攻囲戦を大きな一枚絵で図示するゴドヴィエツキの筆致は、バゼドウのわずかな文章量を割いた語句説明中心の叙述に比してあまりにも精密すぎるほど、ヴォーバン流の要塞都市への攻撃を描写している（図版

LXVIII.)。これに続く1枚絵では、軍隊の野営地がやはり詳細に描かれ、野戦炊飯と食事を受け取りに来た兵士達の姿までもが活写されている(図版LXIX.)。さらに次もまた1枚絵にて、攻撃に備える歩兵横列と支援兵科の整然たるさまが、広い空のもとでその威容を読者に示している(図版LXX.)。

このような、叙述とあまりに釣り合わない戦争関連の図版の豊富さは、いかなる理由に基づくもののだろうか。読者として想定されるべき購入予約者の25%が貴族であり、その5人に1人が軍人ということから、彼らの嗜好と必要性に合わせたのだろうか。¹⁶あるいはまた、現実の社会におけるその重要度と、ある地域では子どもも渦中に置かれていたであろうその実態とを、当時の衝撃のままに映し出したのであろうか。しかし、少なくとも図版におけるその意図は、最後に示された戦場光景を描く1枚絵の図版LXXI.において、何よりも明白に表れてしまう(図3)。

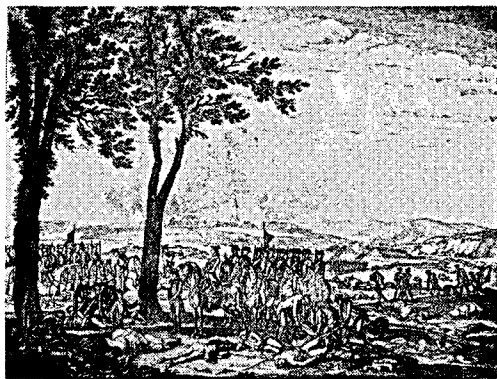


図3

局所的な「小競り合い」を終えた後のこの場面では、護衛の騎兵部隊を従えた指揮官が威儀を正し、そばに仕える士官は大砲のそばで休む兵士に問いかけて慰労している。だが、そのような秩序ある穏やかな空気はこの一か所のみ流れており、はるか背後の平原では両軍の別の部隊が今まさに激突しようとしているのである。さらに、読者の目をいっそう引き付けるのは、右手の方で仲間の重傷者を運搬しようとする一群の兵士達であり、その前方に倒れ伏している数多くの人馬であり、護衛部隊のすぐ手前の画面中央で死者の衣服とブーツを脱がせている味方の兵士達であり、その様子を寝ころんで眺めている兵士であり、画面の左端で木陰の闇にほとんど溶け込むようにして腰をおろし顔を両手にうずめている負傷兵である。遠方の村が焼かれる煙を背景にして、ここには、戦争の悲惨が如実に描かれている。しかも、それは、すぐ隣の図版で攻撃

直前の軍隊の猛々しいさまが描かれていればこそ、いっそう際立つものとして読者に突きつけられているのである。

しかし、バゼドウの叙述は、ここでもコドヴィエツキの図版と微妙なずれを生じさせている。バゼドウは、この戦場の光景についてはわずか数行で片付ける。「軍隊によって解放された戦場には、一部はまだ生きている人馬があちこちにばらまかれている。その多くは明らかに略奪され裸に剥かれている。胸の将星によってそれと分かる勝利者は従兵の小隊を率いており、負傷した士官を発見している。士官はまだ生きており、将官に向かって恭しく高く挙手している。」¹⁷それは、攻撃直前の図版についての叙述が戦闘の流れや索敵行動・側面防御の必要性など詳細に富んでいることに比べて、あまりに簡素である。その一方で、戦争全体に関する彼の叙述の主眼は、このような悲惨をも生むに至る戦争とは何を目的としているのか、いかなる戦争であればその存在を許容できるかについて、子どもに理解させることにあった。

その鍵となるのは、端的に、祖国愛と呼べるものである。「考えてみなさい、お前たちの生まれながらの祖国(Vaterland)によって、お前たちがどれほど多くの善を得ているのかを」。¹⁸戦争は、この善をもたらしてくれる祖国を守り、その利益を増進させるために必要な手段である。ここでもバゼドウは、暴力の必要性をまず説き起こしながら、その無制約の承認ではなく、理性的な制約の範囲を定めようとする。戦争の原因は「相互の憎悪」や「功名心」ではなく「権利を所有すると考えるものをめぐる争いの結果」¹⁹であると規定するのは、バゼドウによるこの試みの一部であった。その正当な所有者さえ軍隊同士の勝敗によって確定してしまえば、理念のうえでは戦争の原因は消滅し、これを相互に確認する条約によって平和が訪れるはずなのである。そして、この自覚のうえに立って戦争を見るならば、たとえそれが悲惨を生じさせるとしても、その被害を理性的に制限し、本来の目的にしたがったものとして許容することが可能となる。「国家は、(文明の進んだ地域では)戦争の目的を満たすためのものとは見なせない損害を、戦争中になすことはない。」²⁰国家がそれに服従する人々の生命と利益を守り、その発展を図るかぎりにおいて、理性的な国家が行う戦争は、個人が理性的制約下の生存衝動に基づき行使する暴力と同様に、限定的に肯定されるのである。

このような、いかにも理性の時代を通過した啓蒙専制君主国家にふさわしいバゼドウの限定戦争観は、当時であってもあくまで理念の水準にとどまるものでしかない。そのことは、七年戦争などの実態を振り返れ

ばすぐに分かるはずのものであった。そして、やがて彼の死後にフランス革命とナポレオンが国家体制そのものを賭ける戦争の時代をもたらすに至って、彼の理念さえもがその有効性を失ってしまうことになる。いや、正しくはクラウゼヴィッツらによって戦争を政治(国家理性)の統制下にとどめようとする努力がなおも続けられていくのだが、その努力は、国家理性間の絶え間ない闘争状態のもとで、手段としての軍事的判断が国家理性を支配するという転倒によって覆され、ついには世界大戦の破局へとドイツのみならずヨーロッパ全土を巻き込んでいかざるを得なくなる。その道のりは、バゼドウが人間本性における生存衝動としての暴力から、家族、社会、さらに国家間戦争に至るまでの暴力のありようを制約化における承認という一貫した態度によって叙述したこのすじみちと、そのまま重なるようにして、さらに死を悼む感情までも動員しながら、人間と文明社会の暴力性を解放したのである。

しかし、バゼドウがこのようなヨーロッパ的男性優位社会による暴力と支配の独占の潮流のなかに生きていたとして、そのことに彼自身が無自覚であったわけではない。むしろ、国家による近代化のすじみちを教育に見出そうとしていたバゼドウは、そのために自発的服従の対象として要請される理念としての国家と、現実に存在する国家との断絶を、明確に認識していた。「人間と同胞の共通福祉のためには、お上(Obrigkeit)がまったく存在しないよりは、不完全なお上のもとにある方がずっとましである。」²¹ 祖国愛について述べた直後に、バゼドウはこのように明け透けな現実的思慮を読者に示す。彼は、ライブニッツが主張した「最善の世界」について、ヴォルテールと同じようにして徹底的な批判を向けるわけではない。しかし、だからといってこの学説に賛同するわけでもない。むしろ、最悪のなかの最善を選ぶということにこそ、バゼドウは平和への手がかりを見出していたとすれば、それこそが人間にとりうる最も理性的な、「万人の闘争状態」としての無秩序を回避しようする行為として理解されるはずではなかっただろうか。

(2) 宗教的寛容と現実的平和

もちろん、バゼドウのこの態度がたんなる現状追認に留まるのであれば、平和は専制的支配と同義となってしまうだろう。しかし、少なくとも彼の時代認識においては、国家理性の暴力は、ある一点において間違いなくある伝統的な暴力の抑制のために必要不可欠なものだった。それは言うまでもなく、宗教的寛容の実現である。『基礎教科書』で歴史的事象を扱う叙述と

図版は、軍事関連以上に多くの紙幅を割いているが、そこでは、エルサレム陥落とユダヤ人追放を劈頭に、いわゆる聖書史上の事件が列挙されている。その中心線は、宗教的寛容の理念が現実的なものとなる過程として描かれる。図版 LXXIII. では、不寛容の歴史が、異端者の火刑からガレー船奴隷、追放や説論などへと変化していくさまが扱われる。図版 LVVVV. では、歴史的事象の説明のなかで、カトリックの祭礼行列にプロテスタント信徒が割り込んで相争う光景が取り上げられる。図版 LXXX. では、ユダヤ教徒に対するキリスト教徒の暴動と並んで、兵士に先導され護衛されるユダヤ教徒が、キリスト教市民と歩行路を分かたれた姿で描写される。

たしかにそれは、国家が独占する暴力によって宗教的寛容を強制された市民の姿であることは間違いない。ここに、19世紀的な教会と国家の関係を看取することも、同じ図版の中にモーゼス・メンデルスゾーンの肖像画が掲げられていることから、的を射ていると言える。しかし、この当時の著名なユダヤ人通俗哲学者を「ユダヤ教徒もあらゆる宗派のキリスト教徒も賛同できる」著作の執筆者として賞賛し、しかしそれにもかかわらず双方の「国民的憎悪(Nationalhas)」がごくわずかしかか和らいでないと現実を直視するとき、²²バゼドウは、やがて到来する国民国家の暴力を抑制するための理性のありかを、「国民的」ならざる個人同士のつながりのうちに、かろうじて確保しようとしていたのである。

おわりに

以上、バゼドウの著書におけるテキストと図版の対照を軸としながら、暴力についての教育的言説とその言説自体がはらむ暴力性の問題について論じてきた。本論を結ぶにあたって、しかし、『基礎教科書』が国家理性の暴力をおそらく超越する別の暴力について描写している事実について、確認しておかねばならない。それは、攻撃者としての非文明の最たるもの、すなわち自然界の暴力である。

図版 XXIII. 以降では、飢餓や身体障害、害虫・害獣や自然災害など、人間による統制の及ばない「悪」の諸相が示されている。しかし、それらは、自然の暴力を人間社会の支配力として子どもに受忍させるための叙述ではない。「自然は、悪に善を、善に悪を混ぜ合わせるが、しかし等量で混ぜるわけではなく、善はずっと多くて悪はずっと少ない。そして、悪は善き原因に由来し、多くの善をもたらすのである。」²³バゼドウは、この理神論的な弁神論に基づいて、自然界にお

ける暴力の意味を、理性的に、すなわち人間を幸福と救済へ導くはずの神の摂理を認識する人間能力によって、肯定的に説明する。それは、文明が物質的には統制し得ない自然界の暴力を、理性的認識によって精神的に支配しようとするものであった。そのことはまた「死」や「悪」の象徴である死神や悪魔を迷信として退けるさいにも繰り返されていくのであり（図版XXV）、さらに自然の暴力を理性によって克服し幸福の礎となしていく過程を、疾病と医療の関係によって説明しようとするのである（図版XI）。

しかし、圧倒的な自然の暴力を前にして、バゼドウが述べるような善の優越がどこまで説得力をもつものだろうか。図版集の巻末近くには、自然学関連の結びをなすかのようにして、暴風雨による難破、ヴェスヴィオ火山の噴火、リスボン大地震といった災厄が列挙されている。この図版XCIIIは、そのような人間の能力を絶する災厄を暗く描き出しており、いずれの光景にも人間は小さく脆弱で無力なものとして登場している（図4）。

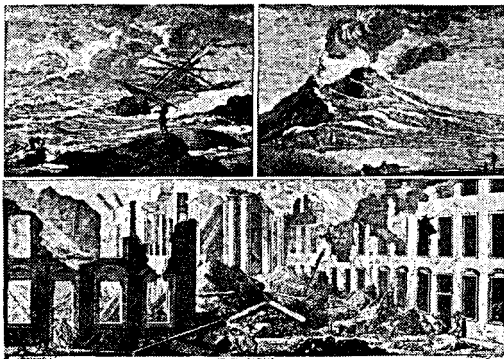


図4

とくに図版の下半分を占めるリスボン大地震は、『基礎教科書』刊行の20年ほど前になる1755年11月に生起し、津波とあわせて数万人に及ぶ死者をもたらした凄まじい被害の実態が当時の全ヨーロッパに伝えられた。それは、ヴォルテールをはじめとする啓蒙主義者たちに、自らが依拠する文明や人知への楽観的な信頼感、そしてそれを支える神意への信仰に対する文字通りの激震を与えた一大事件だった。とくにヴォルテールは、ライプニッツおよびその後継者達による最善説を徹底的に拒絶し、やがてフリードリヒ大王が具現する国家理性との対決をも意図して『カンディード』（1761）を執筆した。主人公の「これがありとあらゆる世界の中で最善の世界であるなら、ほかの世界はいったいどんなところだろう」²⁴という嘆きは、最善説に基づく

弁神論の限界を、自然と文明の悪に直面した理性的人間に向けて避けようもなく突きつけている。

この問題に対するバゼドウの答えはいかなるものであったか。たしかに彼は、地震についても自然災害の一種として論じ²⁵、悪に対する善の優越を説明することで処理しているかに見える。しかし、その一方で、リスボン大地震の図版については、独立した箇所であらためてそこに潜在する神の摂理を教授することはなかった。実際に、この図版XCIII全体に対応するバゼドウのテキストは、『基礎教科書』の中に存在しないのである。この欠落は、本論で検討してきたテキストに対する図版の過剰さが、その最も極端なかたちにおいて露呈したものであるとも理解できる。すなわち、バゼドウの理論的な世界像では語り得ない暴力が、現実世界に存在するという冷厳な事実を、読者に沈黙のうちに語りかけているのである。そして、この天災の光景に続く図版集の最後の数葉が、古代ギリシャ・ローマにおける異教の神々や冥界を描いたものであることを見ると、それはたんにバゼドウが教授内容に包摂している神話学的知識の説明のためのものであるのみならず、現実世界における神々の戦いを、つまり多元的価値観の闘争という非キリスト教的な世界像を、意図せず描き出してしまっていた。

バゼドウが残したこの課題を引き受け、神意のもとにある現実世界を再び子どもに示すのは、『基礎教科書』刊行後数年を経ずして汎愛学舎の後継者ともなるカンペその人であった。彼は、もはやバゼドウのように現実世界をそのまま直接的に教授内容として扱うことはない。その主著である児童文学作品『若きロビンソン』（1779-80）で、カンペは、主人公の難破・漂流生活を通じて、キリスト教的唯一神の摂理としての自然的暴力に導かれた人間の墮落からの救済を物語的に描く。そして『アメリカ発見』（1781-82）では、いわゆる新大陸発見と暴力的征服という歴史的事実を、神の摂理に基づく文明的暴力の敗北過程として描き出す。暴力の理性的抑制と平和の理念はまず物語世界において初歩的な宗教教授とともに子どもに与えられ、この基盤のうえで現実世界におけるその実践が、親子関係のなかで試みられることになる。このとき親子がモデルとする作中人物ロビンソンの境遇と言動は、たしかにバゼドウの意を引き継いで、最悪における最善を探り出そうとする人間理性の強靱さを、その不安と表裏一体のものとして描き出そうとしていたのである。

【脚注】

- 1 佐藤が主張する「大人と連帯して民主主義の発展を推進する有能な実践主体」という希求すべき子ども

- 像は、子どもが大人に「連帯」を求めることを自明なものとしてしまっている。佐藤学「子どもの喪失と消滅＝問題の構図」、『教育学年報8 子ども問題』所収、世織書房、2001年、22ページ。
- 2 森川直「ドイツ啓蒙主義教育学再考－汎愛派のルソ－受容をめぐる」、『岡山大学教育学部研究集録』第104号所収、1997年、83-93ページ。
- 3 Rutshky, K.(Hrsg.), *Schwarze Pädagogik, Ungekürzte Aufl., Frankfurt/M.; Berlin, 1988.*
- 4 金子茂「J.B.Basedowにおける『公』教育思想の形成過程とその基本的性格」、『日本の教育史学』第10号所収、1967年、77-99ページ。
- 5 金子茂「J.B.Basedowの教育・教授論にみられる『服従』の役割－Rousseauとの関連を手がかりとして－」、『九州大学教育学部紀要』第13集所収、1968年。
- 6 バゼドウ「人間の友および有産者諸君に対する提言」, 金子茂訳『国家と学校』所収、明治図書、1969年、137ページ。
- 7 Basedow, J. B., *Elementarwerk mit den Kupfertafeln Chodowieckis u. a. Kritische Bearbeitung in drei Bänden, Fritsch, T.(Hrsg.), Leipzig, 1909, Nachdruck, 1972, Bd.1., S.126.*
- 8 『基礎教科書』における文明と野蛮の対比については、寺田光雄『民衆啓蒙の世界像』, ミネルヴァ書房, 1996年, 49ページ以下参照。
- 9 Basedow, *Elementarwerk, Bd.1., S.143.*
- 10 ebd., S.149.
- 11 ebd., S.196.
- 12 Wild, R., *Die Vernunft der Vater, Stuttgart, 1987.*
- 13 Basedow, *Elementarwerk, Bd.2, SS.109ff.*
- 14 ebd., SS.96ff.
- 15 ebd., SS.113ff.
- 16 Kersting, C., *Die Genese der Pädagogik im 18. Jahrhundert. Campes » Allgemeine Revision « im Kontekst der neuzeitlichen Wissenschaft, Wenheim, 1992. Tabelle: Pränumeranten und Subskribenten.*
- 17 Basedow, *Elementarwerk, Bd.2., S.128.*
- 18 ebd., S.129.
- 19 ebd., S.131.
- 20 ebd., S.131.
- 21 ebd., S.129.
- 22 ebd., SS.233f.
- 23 ebd., Bd.1., SS.326f.
- 24 ヴォルテール『カンディード 他五篇』, 植田祐次訳, 岩波文庫, 2005年, 290ページ以下。
- 25 Basedow, *Elementarwerk, Bd.1., S.323.*